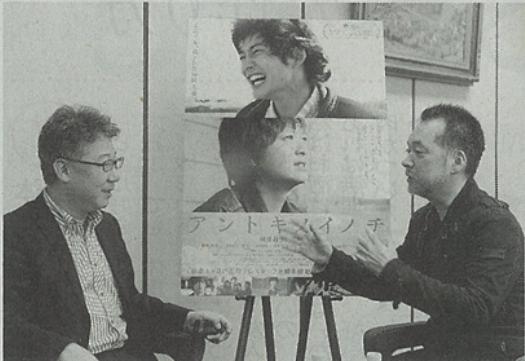


アントキノイノチ

大阪ステーションシティシネマ、なんばパークスシネマ、MOVIX京都、神戸国際松竹ほかで絶賛上映中



吉田 太一氏

よしだ・たいち ●1964年、大阪府出身。引越運送業を経て、2002年「天国のお引越し」をキャッチフレーズに、日本初の遺品整理専門会社「キーパーズ」を設立。現在は講演活動なども精力的に実行している。著書に「遺品整理屋は見た!」「おひとりさまでもだいじょうぶ。」など。

大変な仕事だからこそ現場で得られる喜びが大きい

吉田 うちの現場はホンマに大変なことが多いんです。でも我慢してやり遂げたときに、大きな「ありがとう」が返ってくる。従業員たちは人から頼られる喜

びを現場で体感して、ほっておいても勝手に育ってきます。ただお金ももらわずに、やつはいけない」とまでやつてしまふことがあります。(笑)。

瀬々 遺品整理業って、ボランティア的に思われるけど、吉田さんはビジネスとして成立させる立場を取られているの

が立派。映画作りも似ていて、感動大作を作りましたと言つても、生活するための職業でもある。そのせめぎ合いがあるんですね。本作の主人公のように、心に傷を持つた若者は、ボランティアではなく、世の中を生きる厳しさのわかる仕事だからこそ、変わつていただとつくつです。

瀬々 現代社会で人とつながるため大切なのは想像する力

え方なんかは、すごい現場感覚だな。吉田 そうだったのは、途中からですね。サービス業として始まった仕事なので、最初は遺族の立場から客観的に見ようという意識が高くて。でもそのうちに、現場を天国からのぞいているような感覚をイメージすることが多くなって伝えるものもある。そのせめぎ合いがあるんですね。本作の主人公のように、遺族と故人、遺族と遺品じゃなく、遺品と故人の立場から、亡くなつた後の現場を見たらどう見えるんだろう?と想像できた。僕は宗教的な人間ではないけど、高校時代、友人の死がきっかけで心を閉ざしてしまった永島杏平は3年後、遺品整理業の現場で働き始める。そこで出会った久保田ゆきと、次第に心通わせるようになるが、彼女には思いもかけない過去があった……。

瀬々 映画では吉田さんの著書も参考にさせてもらったんですが、いろんな角度から物を見ようとするとそこが面白いなと思いました。鍋やテレビのような道具が人間にしゃへりかけているという考

相手の立場で考えられないといけない。だから吉田さんの想像する力は、現代においてすごく大切だと思います。今は誰もが大変な状況にいるという当事者意識を持ち、他のことも想像できるようになってきた気がする。吉田さんがやつてきたことが、やつと書いてきてているん

「解夏」「眉山」の作家さだまさしが「遺品整理業」を題材に、生と死を描いた感動作「アントキノイノチ」。その映画化に挑んだ瀬々敬久監督と、作品に登場する遺品整理専門会社のモデルとなったキーパーズの代表取締役・吉田太一氏。「遺品整理業」の現場を通して、生と死に向かってきた2人に、映画の魅力とそれぞれの思いを語りあつていただきました。

吉田 自分の仕事が映画になっているのを見て、涙が出ました。特にこの映画は、現場でのキーパーズの様子がそのまま描かれていて、僕がいつも従業員に話すことや考え方、お客様への接し方まで、さださんの原作にはないものも表現されていた。役者さんたちは現場で生懸命に練習したそつです、監督も現場に行かれたとか?

瀬々 現場に行つて、「生」に触れられる仕事をだなど感じたので、映画でもそこを大切にしたんです。美術部の人間が、脚本には書いていない亡くなつた人の人生を想像して、生活が感じられる部屋を作ってくれたり。そつすることで、演者にもリアルな感情が芽生えてきます

吉田 物が残つていると、見ただけで故人を思い出しますよね。でも部屋の掃除が終わり、遺品整理が終わることで、記憶の中に消えていく。そういう意味で

吉田 は、働いている方たちが、必要以上に感情を出さない。いろいろ感じている人を思い出しますよね。でも部屋の掃除が終わり、遺品整理が終わることで、記憶の中に消えていく。そういう意味で

瀬々 遺族が死を整理して、生へ向かうことを大事にしている。これから生きていいく人たちのための仕事でもあるんですね。

瀬々 遺族が死を整理して、生へ向かうことを大事にしている。これから生きていいく人たちのための仕事でもあるんですね。



瀬々 敬久監督

ぜぜ・たかひさ ●1960年、大分県出身。「感染列島」(2009)などの劇場映画から、テレビ、ビデオと様々な映像作品を発表。「ヘブンズ ストーリー」(10)では、第61回ベルリン国際映画祭の国際批評家連盟賞とNETPAC賞(最優秀アジア映画賞)の二冠を獲得。

映画「アントキノイノチ」に



introduction
イントロダクション

作家としても活躍するさだまさしの同名原作を、「ヘブンズ ストーリー」などで注目の瀬々敬久監督が映像化。岡田将生と榮倉奈々、若手実力派の2人を主演に迎え、生と死が交錯する遺品整理業という仕事を通じて、もがき苦しみながら成長していく若者たちの姿を描く感動作。第35回モントリオール世界映画祭では、革新的な作品に与えられるイノベーション賞を受賞した。